

第七章 沖繩戦幕明け

(1) 連続空襲始まる

三月も半ばを過ぎると硫黄島の戦いは既に敗れ、中部太平洋における日本の防衛線は全面的に破綻の様相を濃くしてきた。南西諸島近海の哨戒にあたっている第八飛行師団（主力は台湾、一部沖繩）及び第二航空艦隊（主力は台湾）に属する哨戒機から敵機動部隊沖繩近海に接近中の飛報相次ぎ、緊迫感是一段と高まってきた。果せるかな、中旬南洋ウルシー環礁（パラオ諸島）及びレイテ方面を抜錐した史上空前の米遠征団は千数百隻の艦船に分乗して沖繩攻略に向いつつあった。

二十三日早朝米艦載機の大群は慶良間進攻作戦に呼応して宮古島に来襲、本格的空襲の火蓋が切られた。米軍は沖繩攻略に先立って先島群島からする特攻機の攻撃を事前に制圧するため、同方面の航空基地の徹底的破壊に乗り出したのである。三十日には延べ五十機が来襲、飛行場及び港湾施設、平良町西里の無電受信所、女学校などに銃爆撃を加え、かなりの損害を与えた。集団司令部は二月中旬に野原越に移動、各部隊も陣地に移ったあとだったので、兵員、資材の損失は殆んどなかったが、大編隊による空襲は官民に大きな衝撃を与え、住民は我れ先にと郊外に避難、市街は無入同様の死の街と化し、日中は防空壕生活を余儀なくされた。

(2) 特攻の戦果あがる

一方四月一日無慮一千隻の大艦隊と一千機の大空軍にまもられて沖繩本島に上陸したアメリカ第十軍（陸軍二個師、海兵二個師）は堅固な洞

窟陣地に拠る日本軍（第六十二、廿四師団と独混四十四旅団、軍砲兵団基幹）に遮られて四月末になっても日本軍の本営首里城の外郭陣地嘉数城間、伊祖、前田、棚原の線が抜けず、戦線は膠着状態に陥った。この方面を担当する第六十二師団は歩兵四個大隊を基幹として編成された独立混成旅団二個からなる警備師団だったが、前任地の北支で数回にわたって実戦に参加、大隊長クラスに有能な将校が多く、又師団長藤岡武雄中将は豪胆沈着をもってこえた將軍、優勢な敵を向こうに回して一歩も退かず米軍の進出を阻止すること月余に及んだ。

この間日本軍の特攻々撃は三月廿七日の広森中尉ら九機による第一陣を皮切りに八月十三日迄、或は二百機内外の大編隊をもって、或は数機の少数機をもって薄暮又は黎明を衝いて行なわれ、陸海合わせて実に七、八五二機が出撃、その半数近くを失なった。

これらの特攻機は九州及び台湾から発進したが、陸軍機は宮古島、海軍機は主として石垣島飛行場を利用した。台湾を発進した特攻機は夕刻中飛行場に着陸、整備及び燃料の補給を受け、あけ方敵艦船を求めて沖繩近海めざして飛び立ったが、大規模な特攻が行なわれた翌日は白川湾方面に多量の敵軍需品や資材が漂着、又無電の傍上によって敵の混乱状態が確認され、特攻の効果があがった事が推察された。

特攻による損害の予想以上に大きいのに驚いた米軍はマリアナのB29の大編隊をして九州、台湾の航空基地を制圧せしめると共に先島飛行場に対する攻撃を強化、三月下旬頃からは英太平洋艦隊も参加、宮古島の上空にも英国機の姿が見受けられるようになった。

友軍対空部隊は全力をあげて敵機のような撃戦を展開、飛行場防衛に全力を尽くしたが、敵機の行動はなかなか勇敢巧みで容易に撃ち落とせなかった。

師団情報班の記録では終戦迄宮古島上空で撃墜した敵機は四十五機、同撃破五十機を算えたが、陸上に墜ちたのは十数機で、残りは海上に逃れ、塔乗員は味方の水上機によってほとんど救助された。宮古島近海の制海制空権は米軍の掌中に帰っていたので、海上にさえ逃がれることができた間違ひなく助かるというのが実情だった。

日本軍陣地の目と鼻の間しか離れていない海上に墜ちた米機の塔乗員を沖繩から飛来した水上機が悠々と着水、救助に当たっている光景を目のあたりに見ながら手も足も出せず、地団駄踏んで見逃がさざるを得ない日本軍将兵の心情は全く無念の一語に尽きた。こういう場合はグラマン数機が上空を旋回、日本軍の攻撃に備えるのが米軍の戦法だったが、日本軍の発砲は陣地暴露を避ける為禁止されていたので、米軍の傍若無人な振舞いに対しても拱手傍觀せざるを得なかった。それにしても一名の飛行士を救助するためわざわざ水上機を呼び寄せ、数機が上空警戒に任ずるアメリカ軍の余裕しゃくしゃくたる戦斗ぶりは物量を誇るアメリカならではの容易になし得ざるところで、あまりに著しい国力の相違を感じしめる一場面でもあった。

米機は爆弾、機銃弾の他、ロケット弾を使用した。物凄いい音を発し、白煙の尾を引きながら飛ぶロケット弾は心理面で及ぼす影響が大きかった。しかし空襲が定期的にくり返されるようになると、住民の恐怖心も次第に薄らぎ、壕の外へ出て畑作業をする姿なども散見され、一種の空襲免疫性の様相を呈したが、時たま大型機による雲上盲爆などが行なわれることもあり、非戦士や家畜がそのトバッチリを蒙って死傷する者も出てきた。

(3) 飛行場防衛に全力傾注

四月一日米軍はついに沖繩本島に上陸したが、この日宮古島の上空は早朝から米機艦載機の大群に掩われ、終日猛爆にさらされ、両飛行場周辺は爆弾の炸裂音と機銃音の交錯で耳もろうせんばかりだった。米機の

主目標は飛行場の滑走路と誘導路及び掩体(土手を築いて中の友軍機を守る)に向けられ、二五〇キロ爆弾を雨アラルの如く降らしたが、地上砲火の威力圏に近づくとを避けたため、弾の多くは目標に命中せず、又不発弾も少くなかったという。中飛行場の対空戦斗は輜重兵第廿八連隊玉木峰司少佐が指揮、飛行場周辺の高地及び平地に布陣した機関砲及び機関銃がよう撃にあたったが、爆弾、ロケット弾、機関砲雨下のなかで対空戦に火花を散らした対空部隊の奮戦敢斗は宮古島防衛戦斗を通じて最大の華だと云える。一資料によればこの日来襲した米機の延べ機数は三百機に及んだというから如何に猛烈をきわめたかがわかる。

防衛庁戦史室保管の資料によれば、四月中の来襲敵機数について判明せる分は次の通り。

(三日) 一四〇機(五日) 二〇〇機(七日) 五十八機(八日) 一二〇機(九日) 七十七機(十日) 十九機(十三日) 二十三機(廿日) 五十八機

米機の空襲は初め専ら軍事施設のみに限られたが、次第に非軍事施設にも及び、なかでも密集地の多い平良市街もその対象にふくまれるようになった。棧橋周辺及び市内目貫き地点にも大型爆弾と焼夷弾が落ち始め、市街地の損害も目立つようになった。これにともなって非戦士員の被害も出るようになり、防空壕に直撃弾を浴び、待避中の一家が全滅したところや逃げ遅れて機銃にやられて死傷する一般住民も少なくなかった。とくに始末の悪いのは時限爆弾で、何時爆発するかも知れないので、落下地点付近は立ち入りも出来ず防火活動をなやました。棧橋周辺には五百キロ級の大型爆弾で直径三、四間もある大穴が数カ所あき、さながら小さな人造湖を思わしめるものがあった。市街地の住民で踏み止まった者は敵機の来襲が杜絶した日没頃壕を出て帰宅、食事をとってホッと一息つく調子。うすぐらい灯の下で僅かの憩いの時間をとる市民の表情はわびしく、なかには住家を破壊され住む家なき市民もかなりあり、戦争のもたらす悲惨を肌で感じせしめられたが、当時は生命すらも保証し得ない逼迫した状況だったので今日の無事をかけての生活だった

野原岳に戦斗司令所を開設した集団では米軍の沖繩上陸によって差当たっての宮古島上陸の危険は去ったと判断したものの、沖繩戦の状況如何によっては宮古島米軍の公算も少くないとの判断に立って陣地構築にピッチを上げると同時に上陸戦に備えての部隊の教育訓練の強化に力を入れた。更に航空機による沖繩特攻作戦に遺憾なきを期すため、昼間空爆でこわされた飛行場の補修工事に全力をあげた。この飛行場作業には始め飛行場大隊と近郊の部隊が動員されたが、何しろモッコと円ビだけでデコボコになった滑走路の整地をするのだから能率があがらず、四月に入ってから特攻作戦の本格化に伴って全部隊が交替で作業に動員されるようになった。しかし切角修復しても翌日はまた爆撃で大穴を明けられるという調子で、まるで破壊と修復のイタチごっこだった。この状況を見た納見集団長は持ち前の果敢さを發揮して修復作業に戦車部隊の投入をきめ、城辺村長間地区に布陣していた戦車第二十七聯隊第三中隊(渡辺兎米大尉)に出動を命じ、戦車の前方に急造の排土板を装着し土砂を爆撃で開けられた穴に押し込み、ふさぐという式の一種の速製ブルト

ーザーとした。この戦車改造ブルトーザーは人力の数十倍の威力を發揮して修復作業に大きな効果を収め、特攻機の飛行場利用を著しく便ならしめたが、戦車側は戦車を本来の目的以外に利用することは必ずしも乗気でなかったようである。然しこの臨機応変、決断と実行力に富む措置は納見集団長の性格の一面の現われであり、幕僚を敬服せしめたという。

(4) 中飛行場上空で初空中戦

第十方面軍(在台湾)では沖繩に対する航空作戦を強化し特攻機による攻撃を容易ならしめるため、中継基地である先島群島所在飛行場の運用を強化することになり、四月七日第三十二軍司令官に対し「先島諸島における航空基地を徹底的に強化し、航空作戦に支障ならしめるため

め、先島集団をして当分の間上陸防禦作戦を顧慮することなく、全力を航空作戦に協力せしめる」ことを命令した。先島集団ではこの主旨に副って飛行場防衛作戦を強化するため、これまで主として高射機関砲及び高射機関銃部隊が担任してきた対空戦斗に重砲を除く山砲、歩兵砲、速射砲などの全砲力を投入、刺し違え戦法で敵機の撃墜をはかり、師団兵器部が開発した豊式空中爆雷をも試用、若干の効果もあげたが、この頃になると敵機の行動は極めて敏捷軽快、巧みに対空砲火網から逃れ、予期した程の戦果はあがらなかったようである。

対空戦斗強化と併行して飛行場の補修作業は昼間も強行されることになり、四月二十二日午後四時頃から友軍機の掩護の下に始めての白昼作業が実施された。

この日は珍らしく敵機の来襲は閑散で上空には在台湾第八飛行師団から派遣された陸軍三式戦斗機(この点正確をかく)数機が警戒飛行にあたり、久方ぶりで白昼仰ぐ日の丸銀翼に作業隊の士気大いに揚がり、復旧工事又トントン拍子に進み、十数機の特攻機が滑走路付近に並び、まさに発進体制にあった。夕刻警戒機が任務を終えて引き揚げんとした際突如敵機の一隊が来襲、低空すれすれに地上の作業部隊に攻撃を加えると共に一隊は日本機に襲いかかり、宮古島上空で初めての空中戦が展開された。不意打ちに狼狽した作業部隊はクモの子を散らすように待避、壕の中から固唾を呑んで空中戦の成り行き如何を見守った。空中戦は彼我秘術を尽して猛烈を極めたが、戦勢友軍機に利あらず、友軍機は被弾、損害続出、一機は火を吹いて墜落、数機は白煙を引いて戦場を離脱して引き揚げた。地上に待機中の友軍特攻機は敵機の地上掃射を受けて被弾、まさに全滅寸前の危機にさらされた。この時壕から脱兎の如く飛び出した数人の将校と下士官があった。と見る間に滑走路付近に並んでいる友軍機にバツタの如く飛びついて必死の力で掩体目がけて押し出した、まさに決死勇敢な行動である。この時は敵機の攻撃は幾分小止みになっていたが、上空には未だ敵機の姿が見受けられ、状況は逼迫していた。然しこれらの一団の将校は身の危険をも顧みず、この重大任務

に挺身した。この殊勲の将兵は地元編成の特設警備隊第二一〇中隊（宮城清昌中尉、現大東糖業専務）の池原万栄少尉と輜重兵第廿八聯隊の将校、下士官三名だった。師団では武功拔群なりとして賞詞を授け、全部隊に布告した。

池原中尉は復員後現在嘉手納農協長をつとめているが、当時を回顧して次の如く語っている。

「地上に待機中の数機の友軍機のうち、端の一機が煙を吹き出した。放っておくと次々に炎上する虞れがあると判断、咄嗟に飛び出して真ん中の機を押し出した。外に数名の将校と兵が協力してくれた。その時は無我夢中だったので、敵機が上空にいるかどうかも気にかけなかった。軍人として当り前の事をしたのだが、数日後師団司令部から呼び出されて一瀬参謀長から賞詞を授けられ、大いに面目を施した」

白昼の飛行場作業は池原少尉らの挺身敢斗を生んだが、空中戦では彼我の實力の相違が暴露され、将兵の士気に影響するところが少くなかった。

（註）賞詞は兵団長（師団又は旅団長級）が出す一種の表彰状のようなもので、感状よりは一段低い、感状は原則として軍司令官以上、又は

独立師団長（例えば小笠原兵団長のような方面軍や軍に属せず、大本營直轄の団团长）しか出せない。

(5) 宮古島から沖繩へ兵力増援を企図

第十方面軍では第三十二軍の攻勢を支援するため地上兵力の増援を計画、宮古島から歩兵数個大隊を小舟艇で沖繩本島へ輸送する案について準備研究を先島集團長に命じた。別資料によれば機帆船五十隻、大型舟艇八十隻を使用することになっていた。集團では陸路参謀が中心となつて船舶工兵隊長らを交えて実施方法を研究したが、当時戦艦大和のような不沈艦と云われた巨艦でさえも沖繩近海に近寄ることが出来ず、途中で撃沈された一事に徴しても明かの如く、制海制空権は完全に米軍に握られ、文字通り蟻の這い出る隙間もない程封鎖されて居り、全く実施不可能の状態であった。間もなくこの計画は中止されたが、陸路参謀は全く無茶なことを云ってくるので、板ばさみになって困ったと、戦後の回想で語っている。

第八章 全島を震撼せしめた艦砲射撃

(1) 英太平洋艦隊出現

四月は空襲に明け、空襲に暮れ五月に入った。この頃の沖繩戦局は最高潮の激しさを加え、日本軍はジリ押しに押され、敵の先鋒は卅二軍司令部の立てこもる首里城に迫りつつあった。日本軍は戦略持久の方針を

堅持して、昼間は洞窟内にひそみ、夜間斬り込みによる肉迫攻撃を反復強襲、戦車に対しては爆雷を抱いての体当り攻撃を敢行、敵上陸軍に多大の出血を強要したが、物量を誇る米軍の猛攻に抗する能わず、次第に後退、島の南部地区に追いつめられつつあった。軍は五月四日九州、台湾からの特攻に呼応して首里前線一帯に於て一大攻勢を実施したが、陸海空よりの敵猛砲火に阻まれ、死傷者続出、一日で攻勢を中止するの止